【4-8 定性的システマティックレビュー】

CQ	11	妊娠中の乳癌患者に乳房温存療法は推奨されるか？
P	妊娠中に乳がんを診断された患者が乳房温存療法を行うことが、その後の乳がんの予後に及ぼす影響を評	
I	妊娠中に乳房温存療法を行った患者	
C	妊娠中に乳房全摘もしくは手術を行わなかった患者	
臨床的文脈	治療：妊娠中に診断された乳癌に対する治療方針を検討。乳がん治療が妊娠に及ぼす影響、および治療内容が乳がんの予後に及ぼす影響を明らかにする。	

O1	局所再発率
非直接性のまとめ	1件のケーススタディと1件のケースコントロールスタディがある。1件は、分娩後に手術を行った患者が含まれている。また、もう1件は全摘を行った症例も一部含まれているが、局所再発はいずれにしても0%なので評価上問題にならない。
バイアスリスクのまとめ	病状により治療方針が影響を受ける可能性があるため、これを加味したうえでの評価が櫃ようである。
非一貫性その他のまとめ	研究間で結果に乖離がある。
コメント	局所再発に関しては、術後2年で局所再発なしとする報告がある一方で、術後5年間の観察では乳房全摘と比較すると局所再発率が高いとの報告もある。

O2	乳癌無病生存期間
非直接性のまとめ	2件のケースコントロールスタディがある。うち、1件は分娩後に手術を行った患者も含まれている。BCTとMastectomyの比較の論文1報と、妊娠時と非妊娠時の比較を行った論文1報。
バイアスリスクのまとめ	背景および病状により治療方針が影響受ける可能性があるため、これを加味した上で評価する必要があるが、著しい偏りはないため大きな問題にはならない。
非一貫性その他のまとめ	それぞれ妊娠中の温存療法と、非妊娠時および全摘の比較であるため、一貫性はない。
コメント	妊娠中の乳房温存療法は、非妊娠時の温存療法と比較して、また乳房全摘と比較して、無病生存期間に関しては同等の治療効果が得られる。

O3	乳癌生存期間
非直接性のまとめ	2件のケースコントロールスタディがある。うち、1件は分娩後に手術を行った患者も含まれている。BCTとMastectomyの比較の論文1報と、妊娠時と非妊娠時の比較を行った論文1報。
バイアスリスクのまとめ	背景および病状により治療方針が影響受ける可能性があるため、これを加味した上で評価する必要があるが、著しい偏りはないため大きな問題にはならない。
非一貫性その他のまとめ	それぞれ妊娠中の温存療法と、非妊娠時および全摘の比較であるため、一貫性はない。
コメント	妊娠中の乳房温存療法は、非妊娠時の温存療法と比較して、また乳房全摘と比較して、乳癌生存期間に関しては同等の治療効果が得られる。